

超越論的論理学の構想における様相論理と遷移構造

細川雄一郎
首都大学東京 OD

カントの超越論的論理学の構想を現代論理学の最新の成果に基づいて形式化し、カントの構想が現代の形式論理に対してもつ意義に照明を当てる試みが、すでに T. Achouriooti and M. Van Lambalgen (2011) によって試みられている。この試みは、直接には、一階述語論理式のうちで極めて重要な特性をもつ *geometric formula* によって、超越論的論理学がもつべき構文論的形式と意味論的構造を、技術的に再構成しようとするものである。この試みの最終的な成否に関わらず、そこにカントの論理思想と現代論理学をつなぐ重要な洞察が含まれていることは、否定できないものと思われる。その洞察とは、*geometric formula* がもつ次の極めて重要な特性、すなわち、その式が直接妥当性をもつ領域の構造が保存された、それとは別の領域での、当の式の妥当性の保存、ということこそが、判断における対象の客観的統一、判断の客観的妥当性の根拠である、というものである。本提題では、この特性が実は、*geometric formula* と密接な関係をもつ *modal formula* 一般において、より顕著な形で実現されている、という見通しのもと、様相論理とそのモデルである遷移構造が、カントの超越論的論理学の構想、その実現においてもつ意義を提示する。